助詞について

森田良行

1. はじめに

助詞は言語として日本語を特色づける重要な特徴の一つである。助詞をじゅうぶんに理解しないと，構文や文意をとらえることが困難となる。助詞は文型を形成する主要な要素だからである。

助詞，特に格助詞は，あとに続く用言的概念の語によって，どの語を使うべきかがほぼ決まっている。「山―住む」なら「に」，「山―暮らす」なら「で」というふうに。しかし，同じ動詞でも，前に来る事柄の内容によって「山―のぼる」なら「に」，「階段―のぼる」なら「を」というふうに使い分けをする場合もある。そこで「夜店―見に行った」と言いたいとき，夜店が見る対象なら「夜店を見に行った」となり，行く目的地なら「夜店へ見に行った」となる。両者はさらに，行く場所や見る対象へ格／ヲ格を補って，

○浅草へ夜店を見に行く。

○夜店へ金魚すくいを見に行く。

のように「……へ……ヲ見に行く」の組み合わせへと拡張することが可能である。このように助詞の使い分けは，単に前後の語同士の意味関係だけに限ってとらえるべきではなく，全体としての文型を支える部分要素として巨視的に眺めていかなければならない。助詞を文型的視野でとらえることによって，たとえば「私―彼―先生―紹介する」というような三者間の人間関係と行為でも，それをどのような情報としてまとめ上げるかが可能となっていく。

私は彼を先生に紹介する。
私は彼に先生を紹介する。
私は彼と先生を紹介する。
私を彼は先生に紹介する。
私を彼に先生は紹介する。
私に彼は先生を紹介する。
私に彼を先生は紹介する。
私に彼と先生を紹介する。
私と彼を先生に紹介する。
私と彼を先生は紹介する。
私と彼に先生を紹介する。
私と彼と先生を紹介する。
私と彼と先生に紹介する。

のように，助詞同士の組み合わせ方によって叙述内容は異なってくる。表現的見地から言えば，助詞を正しく使用しないと文意に誤解を生ずることになるのである。そのため日本語教育，特に初級授業では助詞の学習（ということは結局，文型学習）は授業の中心的作業の一つとなっている。本稿では助詞を国文法の立場から解説するのではなく，日本語教育の場においてはどのような観点からとらえていったらよいのか，どのような点が教育上問題となり，どのようなことに注意すべきかを述べようと思う。

2. 助詞の種類と機能

「私—彼—先生—紹介する」の例でもわかるように，助詞の組み合わせによって一つの文を作り出すのが膠着語としての日本語の特色である。助詞は他の概念語（橋本文法で言う自立語，時枝文法での詞など）に付いて，(1)概念語相互の文法的意味関係を明らかにしたり，また，(2)話し手の在り方や表現態度を明らかにして全体を一つの具体的な表現へと塗りかえる。助詞を用いることによってはじめて具体的で的確な思考内容を文に表すこ

とができるわけである。

ところで，一口に助詞と言っても，助詞ごとにその役割りは異なっている。(a)体言に付いて体言同士の関係を示すもの，(b)(c)体言および体言的資格のものに付いて，用言および用言的概念の語に対してどのような関係にあるかを示すもの。詳しくは，

(a) 体言　対　体言……の，や，と，に

(b) 体言　対　形容詞……が，の，に，と，で，より

(c) 体言　対　動詞……が，の，に，と，で，を，へ，から，より，まで

等の語が挙げられるが，これらは文中にあって叙述内容を順次限定していく「格助詞」である。特に(b)(c)は後続用言によって使用が制約される（いわゆる用言の格支配），言ってみればその文のわく組みの中で一つの文型を形成していく助詞と言ってよい。

同じ一つの文中にあっても，種々の語や句に付いて述語に係り，述語の意味や陳述性に関係していく助詞がある。これは通常「副助詞」と呼ばれ，その中で特に陳述性にのみ関与してくるものを「係助詞」として別扱いにする立場もある。体言，用言，その他に付いて述語に係り，話し手の立場や意見を添える助詞である。強調・疑問・限定など表現における話し手の意図を添える助詞と言ってもいい。

「は，も，なら，こそ，さえ，でも，しか，まで，ばかり，ぐらい，ほど，だけ，など，やら，なり，か」

などが挙げられる。

さらに，用言および用言句に付いて，あとの用言（および用言に準ずるもの）に続ける役割りを果たす「接続助詞」がある。これは「て，ながら，たり，から」のような単文中でも用いられるものもあるが，多くは句末にあって他の句と結びつけ複文を構成する。

「ば，と，ても（でも），けれども，が，のに，ので，から，し，て（で），ながら」

などがある。構文と深い関係があり，従属句との意味関係が特に問題となる助詞である。

以上が，文中にあって働く助詞であるのに対し，文末に位置して文の叙述に，話し手の表現態度や対聞き手意識に根ざす働き掛けの意図を添える助詞として「終助詞」がある。これには，文中の文節の切れめに現れる「間投助詞」も含めてよかろう。

「か，かい，かしら，の，わ，ぞ，ぜ，とも，さ，よ，や，ね，な，なあ」

など種々の語が挙げられる。

このように，助詞と言っても，文中にあって文型の拡張にあずかる格助詞・副助詞，句末に現れてそれらの句を複文へと拡張する接続助詞，ただ文末にあって文の叙述態度を明示する終助詞と，文型形成の見地から大きく3種に分けることができる。

さて，助詞を以上のように文型形成の観点からとらえると，日本語教育における学習の対象としての助詞の重要度がある程度はっきりしてくる。日本語学習は文型中心に進められるからである。次に掲げる表は早稲田大学語学教育研究所編の「外国学生用・日本語・初級」で扱われる助詞の種類と提出順を示したものであるが，単文の文型形成にあずかる助詞，特に叙述内容を組み立てる格助詞は比較的早い前半の課に，述語に係って話し手の意見や立場を際立たせる副助詞はそれより少しおくれて中ほどの課に，複文文型にあずかる接続助詞は後半の課に，文末に位置して話し手の感懐を文意に添えるだけの終助詞はごく限られたものを除いて特に教授しない，といった具合いである。

3. 格助詞について

右に示した表からもわかるように，格助詞は比較的早い課で与えられるのが一般である。種々の格助詞を学ばなければ，かんたんな文でも日本語で表現ができないからである。実際に現れる用例を見よう。以下に掲げた

課	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
格助		の		を*	に，へ，と	を（と）	で	（に）	が	から*			（から）まで		や		（で）*	を自動（で）	の〈同格〉	の〈主格〉	
副助	は，も				ぐらい*				か	こそ*	（も）						（ぐらい）				など*
接助													て	（て）が*			（が）			ながら，たり	
終助	か		ね*よ*							（ね）											

課	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
格助		より		と〈引用〉				（から）											
副助					しか*		ほど*きり*	だけ，しか	ばかり*	（か）									（ばかり）
接助		ので		から*		ば*	（が，から，ので）けれども，し*				（ば）			と		（し）			
終助								（か）*		（ね）	わ*ねえ*								

＊印は本文中で初出。その他は文型練習として。（　）は他の用法として再出。

例文は，各課の文型表から抜いたものである。特に文型練習としては行わないが本文中に用例の現れるものは＊印を付して，本文での用例を掲げておいた。（　）内の数字は課の番号である。

1. これはすうがくのほんです。（2）
2. このほんはたなかさんのです。（2）
3. おちゃをどうぞ。（4）*
4. 田中さんはどこへ行きますか。（5）
5. 田中さんはどこに行きますか。（6）
6. 田中さんはともだちといっしょにべんきょうします。（5）
7. わたしはコーヒーを飲みます。（6）
8. こうちゃとコーヒー（6）
9. わたしはとしょかんでレポートをかきます。（7）
10. じゅぎょうは四時におわります。（7）
11. 大学のちかくにあります。（8）
12. ここにうちがあります。（9）
13. これからシューマンの「ゆめ」をひきます。(10)*
14. 二時二十分から（13）／中野から（13）
15. 五時まで（13）／早稲田まで（13）
16. ももやさくら（15）
17. デパートへおみやげを買いに行きました。(18)
18. 電車で行きます。(18)
19. 道を歩きます。(18)
20. 日本人の鈴木さん（19）
21. 安いの（19）
22. たびをはいてから着物を着ます。(20)
23. そでの長い着物（20）
24. そこよりここのほうがいいです。(23)
25. 山に登ると言いました。(25)

所有格「の」（例文１）並立の助詞「と，や」（例文８，16）および準体助詞「の」（例文２，21）同格「の」（例文20）が体言を続ける以外はすべて用言，それもほとんど動詞があとに続く。動詞が要求する格として述語動詞とセットになって与えられ，学習者は一つの文型の拡張要素としてこれらの助詞を習得していくわけである。だから，

「私は学校へ行きます／私は10時に学校へ行きます／私は10時に友だちと学校へ行きます／私は10時に友だちとバスで学校へ行きます」

のように，この課では格助詞「へ，に，と，で」のうち，帰着点を表す「～へ」，動作・作用の行われる時刻・日時「～に」，共同動作の相手「～と」，手段・方法「～で」が文型を形づくる格同士として「帰着点―時刻―共同動作者―方法―動作」を結びつけ一つのまとまった表現となることを習得させる。もちろんこのような格関係の序列は不変ではなく適宜前後の順序が入れ替えられることも同時に練習を通して教えておく。（化成の結果を表す「……になる／……にする」などの「に」は入れ替えが不可能。）

先にも述べたが，「の」および並立の「と」「や」を除いては，ほとんどの格助詞が動詞文の中で現れるため，動詞を扱う課に進むまでは，生徒は助詞の学習ができない。裏を返せば，複雑で長い文型を学ぶ機会がない。動詞を学ばなければ思っていることが表現できない，コミュニケーションが思うようにならないという学習者の感想も，もっともなことである。受身や使役の学習，「～ている」や「～てある」表現の学習も，けっきょくは受身文型や使役文型などを学ぶこと，つまり格助詞の学習にまで戻っていくのである。文型と格助詞とは深い関係にある。初級授業で与えられるさまざまな文型は，格助詞の問題を抜きにしては扱えないと言ってもいいだろう。

4.　副助詞について

副助詞は，係助詞も含めて，以下の述語に係っていく語に付いてそれを

題目として示したり，強調・疑問・限定・例示・程度性などの気分を添える助詞である。特に係助詞は述語の陳述性に呼応するので注意を要する。

副助詞がこのように表現における話し手の判断の在り方をそれぞれの語に加える語であるため，単に叙述内容を付加していく格助詞と違って，教育の場においてもその扱いは遙かにむずかしく工夫を要する。格助詞はその叙述内容を盛り込む一つの文型として形式的に覚え，「へ，に，を，で，と，から，まで」等の使い分けは，動詞とそれが要求する格概念との関係における使い分けとして，拡張練習などによって身に付けていけばよかった。* 一方，副助詞は先行語に話し手のどのような判断が加えられているかを理解しなければならず，そのような判断が添加される表現の学習は，ただ文型練習だけを機械的におこなっても身に付くものではない。この点が格助詞の学習と大きく異なるところである。その場での話し手の特異な判断は「場面」と「文脈」によって左右される。たとえば，

「学生に教えます。／学生に日本語を教えます。」

という表現は，それ自体一つの文型として独自に成り立っているが，

「学生に英語も教えます。」「学生に日本語だけ教えます。」

となると，「学生に日本語を教えます。英語も教えます。」「学生に日本語を教えます。英語は教えません。日本語だけ教えます。」のように，格助詞による基本的な文型を前提として，それとの対応ないしはそれを発想の出発点として場面を展開させ，そのような限定された特異な場面・文脈を前提としてはじめて把握することができる。だから副助詞を含む文の文型練習は場面設定が大切であり，その場面・文脈からの必然的帰結として副助詞文を習得させるよう努めなければならない。そして，このことは文型練習は場面設定が肝心であり，そのような助詞（または助詞の組み合わ

---

* 格助詞については次のものを参照されたい。
「動詞表現における助詞の用法」（講座日本語教育　6）
「動詞文について」（講座日本語教育　10）
「文型について」（講座日本語教育　12）

せ）はどのような場面のとき用いる表現かを確実につかませておく必要がある。

A．教室にだれがいますか。（9課）

B．教室にだれかいますか。（9課）

助詞一つの違いであるが，文型的には大変な差がある。Aは教室に人のいることを前提として，その人物がどの人か不明であるという場面設定である。だから，

「教室に学生がいます。／だれがいますか。／田中さんがいます。」

のように問答は展開される。

「教室にいるのはだれですか。⟶だれが教室にいますか。」

主格を表す「が」を用いた転位疑問文である。（は→が）「だれが……」は“大勢（3人以上）の中のどの人物が……”である。「何がありますか／どこがいいですか／どれがあなたのですか」などもこれと同類の表現と言えよう。

一方，Bは副助詞「か」を用いたことにより，不明の事柄に対する不確実な判断を表す。人がいるのかいないのか不明な場面である。「だれかいる」と判断することができかねている疑問状態の表現である。だから

「教室にだれかいますか。いいえ，だれもいません。／はい，だれかいます。」

の肯否判断が回答として返ってくる。また，「だれかいますよ。」のように「いる」と判断し得る場合は平叙文で述べることもできる。格助詞「が」では「だれがいますよ。」と，不定詞＋「が」を平叙文で用いることはできない。疑問の判断を添える副助詞「か」を加えれば「だれかがいますよ。」と平叙文で用いることが可能なのである。

格助詞文型を変形するとしばしば強調や対比の副助詞文型となるので注意を要する。

「私がピアノをひきます。」（10課）

ピアノを弾くことを前提として

「ピアノをひきます。／だれが？／私が……」

行為（述語）の主格として弾き手（行為主体）をだれがと示す発想である。これを「ピアノは私がひきます。」と変えると，「ピアノは」の副助詞部分に選択判断が働くために，“いろいろな楽器がある”という場面設定の上で「フルートは……／バヨリンは……」ときて「ピアノは……」と取り立てる題目選定の表現となってしまう。このように格助詞文型を副助詞文型に変形するときは（ピアノを⟶ピアノは）文型練習として場面設定の違いをしっかり踏まえておかなければならない。くり返すが，助詞の問題は文型の問題に発展し，文型の問題は場面の問題に戻らなければ正しい言動行動としての言葉の学習とはならないことを銘記すべきである。

では場面的状況に還元すればそれでよいかというと，それだけでは十分ではない。同じ助詞，たとえば「も」なら，「も」の用いられる表現は必ずしも「ピアノは私がひきます。バヨリンも私がひきます。」のような，同類の人物・事物・行為・状態があることを前提とした場面とは限らない。

「さすがの彼も参ったらしい。」「見たこともない果物。」「わかりもしないくせに，知ったかぶりをしている。」「靴も履かないで飛び出した。」「何も知らずに，のこのこ出掛けて行った。」「一流校に80人も合格した。」「いついかなる時も，おさおさ油断おこたりない。」「チャンピオンの座を辛くも防衛した。」

これらは日常的で目立たぬごくありふれた事物か，逆に極端に予想外の事物・状態か，そのどちらかを提示して叙述の範囲がそこまで及ぶことを示す。場面的状況よりも，事態に対する話し手の判断の特異な在り方のほうが主となっている表現である。このように副助詞は場面プラス話し手の特異な判断の総合の上に成り立つ語なのである。

5. 接続助詞について

接続助詞には，(1)「歩きながら話す。」「歩いて行く。」のように修飾語を造るもの。(2)「歩いてみる。」「歩いている。」「書いてない。」と補助用

言を導くもの。(3)「彼はそのことを知っていながら，知らぬと言い張る。」「彼はそのことを知っていて，教えてくれない。」のような複文の前提句をなすもの等がある。「て」はこの三つの段階のいずれにも働く助詞である。二つ（以上）の事態・作用・行為が共存もしくは継起するとの判断の表現に用いられる。二つの事態間の関係によって，“共存・共起”と“継起”とに分かれ，相互の意味関係からこれをさらに平接・順接・逆接に細分するのが一般である。順接・逆接は条件表現として特別視され，条件の立て方から仮定条件と確定条件（既定条件）とに区分している。以上の諸問題は本講座の次の諸論で詳しく述べたので，それに譲る。

「条件の言い方」（講座日本語教育３）

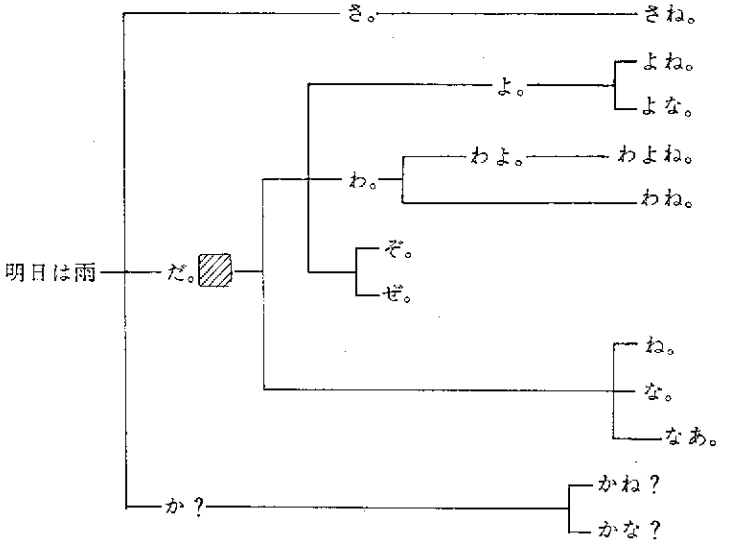
「複文の文型練習」（講座日本語教育11）

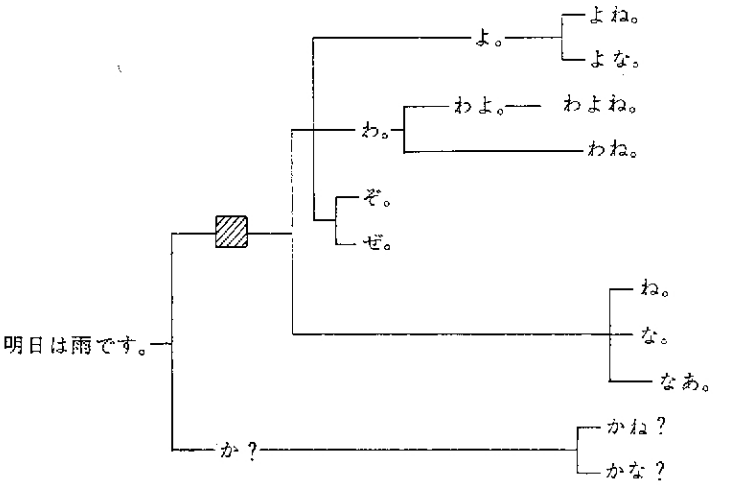
補助動詞による表現文型の学習と，複文文型の学習において問題となるのがこの接続助詞である。当然，格助詞・副助詞による基本的な文型が一通り終了したところで入っていくのが，接続助詞による複文文型であると言っていい。

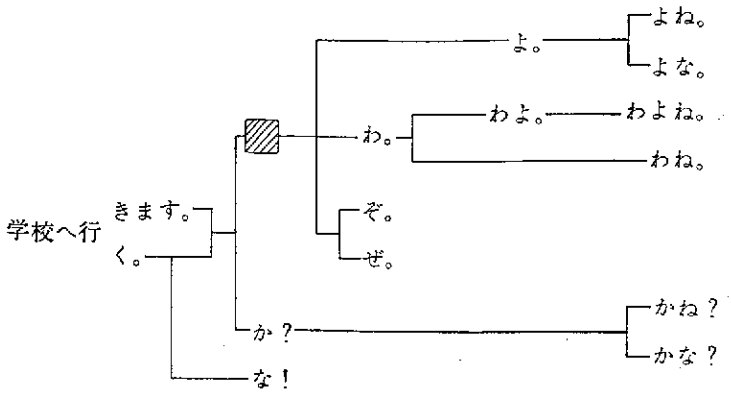
6. 終助詞について

文末にあって，その文の叙述に話し手の表現態度や意図を添える語である。一般には，文末に付いて疑問・禁止・詠嘆・感動などを表す助詞とし，また，文中の各文節の終わりに添えて「私ね，きのうね，学校でね……」「おれさ，きのうさ，学校でさ……」のように一語一語確かめながら聞き手に話し掛ける意識を強調する，いわゆる間投助詞もこれに含めて扱っている。このように終助詞をただ文末（文節末）に添える感情表出の語として一括処理すると，終助詞の中にも疑問や詠嘆や念押しや呼びかけなど，いろいろあることばの表し方，文末に添える順序，男女によることばの使い分け，名詞文や形容詞文・動詞文ごとに相違する終助詞の使い方，普通体・丁寧体による違い，文末にくる助動詞――結び文型の違い――によって生ずる終助詞承接の制約などが，はっきりと身に付いていかない。今，

言い切りの平叙文に付く終助詞の承接関係を表にしてみよう。







文の統括機能・陳述作用には一定の順序がある。

食べさせ られ たく なかっ た らしい。
使役 受身 希望 打消 時 推量

と並んだ「用言＋助動詞」の文に，さらに終助詞を付加していくと，

……たくなかったらしい { か？ / ……わよね。

～か……(1)平叙・疑問段階（問いかけ）

～わ……(2)男女ことば段階

～よ……(3)確述段階（知らせ）

～ね……(4)確認段階（詠嘆・念押し）

の四つの段階の助詞が並ぶことがわかる。この段階の付加順序は一定であるが，どのような形の文末にでも皆一様に接続していくかというと，そうではない。文末述語の形態によって続いたり続かなかったりする。次に接続の可否について表を掲げておこう。

	禁止	呼びかけ	詠嘆			疑問				確述						確認	
	～な！	～よ！	～ねえ	～なあ	～か！	～か？	～かい？	～かしら？	～の？	～わ	～ぞ	～ぜ	～とも	～さ	～よ	～ね	～な
雨 明日は雨	×	○ ×	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	×
静か	×	×	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	×
雨だ 静かだ	×	×	○	○	×	×	×	×	～な ○	○	○	○	○	×	○	○	○
雨です 静かです	×	×	○	○	○	○	△	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○
暑い	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
降る	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
降ります	×	×	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○

上の表は肯定形（平叙文）に限って考えたわけであるが，この否定形（否定文）も見ていく必要があるし，また，「～た／～だろう／～でしょう／～よう／～かもしれない／～らしい／……」等さまざまな助動詞で止める文（種々の結び文型）についても同じように承接の可否を見ていく必要があろう。（これらは当然，承接上の制約が多くなる。）